

マソラ本文箴言 16章 1-9節における並行法と構造

Parallelism and Structure in the Masoretic Text Proverbs 16:1-9

加藤 久美子

Kumiko KATO

要 旨

本研究では、第二神殿期ユダヤ教で形成された文書である箴言の第II部(10:1-22:16)が精巧に構成された作品である1つの証拠を提示するために、マソラ本文箴言16章1-9節に見られる詩行間の意味、文法、音声の面における並行法を詳述し、これらによる構造を明らかにした。16章1-9節には、主として2つの構造がみられる。第一は、語の反復による二重の囲い込み構造(A1節, B2節, B'7節, A'9節)であり、第二は、詩行の意味による構造である。後者は、2つの三つ組み(1-3節, 5-7節), 補足(4節, 8節), 結び(9節)からなる。第二の構造では、詩行間は意味だけではなく、統語法、語や句の順序、語形、音声の対応関係によっても結ばれている。第II部全体における、これらの面を含む並行法の分析によって、アフォリズム文学の一作品である箴言第II部の文学的構造の解明は促進されることが考えられる。

1. 序論

本稿は、第二神殿期ユダヤ教研究の一環として、マソラ本文箴言10章1節-22章16節における文学ユニット16章1-9節にみられる並行法と構造を論じるものである。

マソラ本文箴言は、書物内の表題および文学的形態に基づき、表題(1:1)、序文(1:2-7)、7つもしくは9つの部分に分けることができる。七区分と九区分では、第I部から第V部までは一致し(I. 1:8-9:18. II. 10:1-22:16. III. 22:17-24:22. IV. 24:23-34. V. 25-29章)、九区分では、七区分における第VI部、第VII部(VI. 30章. VII. 31章)が2つに分けられる¹⁾。10章1節-22章16節はいずれの区分法でも第II部にあたる。以下これを箴言第II部と呼ぶ。

1) 31章は文学的形態によって一義的に区分できるのに対して(VIIa. 31:1-9. VIIb. 31:10-31)、30章については、形態あるいは内容に基づく異なる区分が提案されている。例えば、ヘムザー、マインホルトは1-14節と15-33節に、フォックスは1-9節と10-33節に分ける(Gemser 1937, 3; Meinhold 1991a, 23-24; Fox 2009, 850)。

1. マソラ本文箴言と七十人訳箴言²⁾

第二神殿期ユダヤ教において形成された書物である箴言は、マソラ本文箴言と七十人訳箴言という 2 つの主要な版によって伝えられているが³⁾、これらの間には様々な違いがある⁴⁾。対応する詩行の意味の違いの他に、句や詩行の余分や不足⁵⁾あるいは順序の違い、また、大きな区分の順序や表題の違いがある⁶⁾。七十人訳箴言は「自由で、パラフレーズ的な性質」(Forti 2017, 254)を持つことが知られており、これらの違いの多くはこうした翻訳手法に由来すると考えられるが (Tov 1999, 420-424; Forti 2017, 254-255)、詩行や句の不足、あるいは句、詩行、大きな区分の順序の違いについては、これらを翻訳者に帰す研究者がいる一方、翻訳者がこのような変更を加える理由がなく、また単なる誤写にしては多すぎるとして、その原因を七十人訳の底本と原マソラ本文 (すなわちマソラ本文のもととなった本文) の違いに帰す研究者がいる⁷⁾。

近年の研究では、ユダヤ教において聖典とされる書物の本文として、原マソラ本文が確立するのは、後 2 世紀の第二次ユダヤ戦争以後であり、一定の権威を認められた聖典であっても、第二神殿期にはまだ本文は完全には固定されていなかったとされる (Urlich 2016, 12)。また、それらの書物の本文は直線的に発達したと考えられるが、例外的に箴言と出エジプト記 35-40 章には「並行本文」が存在した可能性が指摘されている (Tov & Urlich 2016, 17-18)。

本稿で論じる 16 章 1-9 節を含むマソラ本文箴言 15 章 27 節-16 章 9 節は、箴言の中でも特に、七十人訳との違いが大きい部分の 1 つである。マソラ本文の章節番号を用いて、違いを略述すると次のようになる。七十人訳箴言には、マソラ本文の 15 章 31 節、16 章 1-3 節に対応する節がない。その他 (15:27-30, 32, 33; 16:4-9) には対応する節があるが、それらの中で 16 章 6-9 節は、マソラ本文の順序を保ちながら、15 章 27-30 節に織り交ぜるように配置されており (Rahlfs 版 15:27a, 28a, 29a, 29b)、また 16 章 4 節は、16 章 10 節の前にある (Rahlfs 版 16:9)。さらに、七十人訳には

2) 七十人訳聖書 (Septuagint) という名は、現在 2 つの意味で使われている。第一にこれは、聖典タナッハに含まれる書のユダヤ教徒による最初期のギリシア語訳を意味する。このギリシア語訳の本文には伝承の過程で様々な改訂が加えられたが、この意味での七十人訳は、再構成された元の訳を指し、古ギリシア語訳 (the Old Greek translation) とも呼ばれる。第二にこれは、キリスト教で伝承されたギリシア語の聖典集を意味する。これには、前述のタナッハに含まれる書のギリシア語訳の他に、ユダヤ教徒によって書かれた他の書の翻訳、およびユダヤ教徒によってギリシア語で書かれた書が含まれている (Tov 2012, 128-129)。本稿でいう七十人訳箴言とは、第一の意味すなわち学術的に再構成された古ギリシア語訳の箴言を指す。古ギリシア語訳箴言は、前 2 世紀中期-後期に成立したと推定される (Cook 1993; Fox 2015, 36-37)。古ギリシア語訳の校訂版の中では、多数の写本に基づくゲッティンゲン版が重要であるが、箴言は未刊であり、Rahlfs 版 (Rahlfs 1976) が用いられる。

3) フォックスによれば、箴言の古代語訳版の中で最も重要なものは七十人訳である (Fox 2015, 35)。箴言のマソラ本文、七十人訳、ベシッタ、タルグム、ウルガタ訳の関係について、Fox 2015, 35 を見よ。

4) 両者の相違点について、Scoralick 2002; Tov 1999; Tov 2012, 304-305; Fox 2015; Forti 2017, 253-259; Polak 2009 を見よ。フォックスによる箴言の校訂版 (Fox 2015) では、各節の違いが示され、個別に原因が論じられている。

5) 七十人訳における余分 (pluses) と不足 (minuses) について、Forti 2017, 253。

6) 上述のマソラ本文箴言の七区分あるいは九区分のうち、七十人訳では、24 章 23 節以下 (第 IV 部以下) の順序が異なっている。マソラ本文の章節番号を用いて表すと、30:1-14; 24:23-34; 30:15-33; 31:1-9; 25:1-29:27; 31:10-31 の順である。ここでは 30 章を 1-14 節と 15-33 節に分ける九区分が前提されているように見える。

7) 前者の例としてクック、後者の例としてトーヴが挙げられる (Cook 1997, 312-315; Tov 1999, 424-431; Cook 2003)。

マソラ本文のどの節にも対応していないようにみえる節がある (Rahfs 版 16:2, 7, 8)⁸⁾。後述するように、マソラ本文箴言 16 章 1-9 節には、1 節と 9 節による囲い込み構造、1-3 節および 5-7 節におけるアフォリズムの三つ組みなどが認められるが、七十人訳箴言では、これらの構造は完全に解体されている。上述のように、このような違いは七十人訳の底本がマソラ本文と異なることに由来するとする見方があるが、スコラリク、ポラックはそれぞれ七十人訳箴言のテキストを分析し、マソラ本文と異なる七十人訳箴言のアフォリズムの配列を、底本ではなく、翻訳者に帰し、翻訳者は単に原マソラ本文の文学的構造を破壊したのではなく、異なる意味を持つ新しい作品を創出したのだとしている (Scolarick 2002, 58-72; Polak 2009)。

本稿では、マソラ本文箴言が第二神殿期の原マソラ本文をかなりよく保存しているという想定に立ち⁹⁾、マソラ本文箴言 16 章 1-9 節を取り上げる。これに対応する文学ユニットが七十人訳箴言には存在しないという事象の評価については、今後の課題としたい。

2. 課題

箴言第 II 部は、人間の生に関する真理を簡潔に述べたアフォリズム¹⁰⁾を並列したアフォリズム文学である。アフォリズム文学としての箴言第 II 部には、2つの際立った特徴がある。第一は、原則としてすべてのアフォリズムが並行法によってつながれた二句からなる一詩行¹¹⁾であること、第二は、隣接、近接するアフォリズムの間、あるいは離れた位置にあるアフォリズムの間に並行法が設けられ、アフォリズムが相互に結びつけられていることである。

このような特徴を持つ箴言第 II 部は、2つの方法で読むことができる。第一は、アフォリズムを個々に読み、人生の状況に適用する方法である。これは古来一般的なアフォリズムの読み方であり、聖典としての箴言の受容史においても、第 II 部はこの方法で読まれ、そのアフォリズムは個別に引用されてきた¹²⁾。第二は、並行法によって複数のアフォリズムがつながれたテキストを、1つの作品 (composition) として読み、作品の文脈においてアフォリズムを解釈する方法である。この読み方は、かつて聖書学では小規模な単位について希になされるだけであったが、1990年代以降、第 II 部の作品構成 (composition) の手法が明らかにされるにつれて、より大きな規模のテキスト、あるいは第 II 部全体をこの方法で読む試みがなされるようになった¹³⁾。

この第二の読み方を可能にしたのは、1980年代になされた並行法理解の刷新である¹⁴⁾。聖書ヘブライ詩の作詩法である並行法については、18世紀にロバート・ラウスが立てた詩行内の句の意味

8) フォックスは節の対応関係をわかりやすく表にまとめている (Fox 2015, 239-240)。ただし「[16:12b] 16:12b」は「[16:12b] ≠ 16:12b」の誤り。彼自身記しているように、七十人訳の 16:12b はマソラ本文 16:12b に対応していない (Fox 2015, 245)。

9) 死海文書に含まれる箴言のヘブライ語本文の古写本のいくつかの断片について、Ulrich 2000, 181-186; Fox 2015, 18-19 を参照。

10) アフォリズムは、狭義には 17 世紀以後ヨーロッパで確立した文学形式を指すが (池内 2014)、ここでは、人間の生に関する真理を簡潔に述べたもので、俚諺ではなく、作者によって書かれたものという広い意味で用いる。

11) 本稿では、2つないし 3つの部分からなる聖書ヘブライ詩の基本単位を「詩行」、詩行を構成する部分を「句」と呼ぶ。箴言第 II 部ではマソラ本文の各節が 1 詩行を、節の a と b が 2つの句すなわち前句と後句をなす。

12) 新約の文書においても第 II 部の詞は個別に引用されている。例えば、箴 10:12b の 1 ペト 4:8 における適用を参照。

13) 箴言第 II 部の文学ジャンルに関する議論について、加藤 2020, 113-115。

14) ラウスの 3 類型と 1980 年代の並行法の概念の刷新について、加藤 2016, 9-68。

の対応関係に基づく 3 類型が基本となっていた。これに対して、アデル・バーリンらは、言語学的研究に基づき、意味だけではなく、音声と文法の面をもつものとして並行法を定義した。それによれば、並行法とは、音声、意味、文法の 1 つもしくは複数の面 (aspects) における言語学的に等価の要素を結びつける現象である。意味の面には、語、フレーズ、句、詩行のレベルがあり、文法の面には、語形と統語法のレベルがある。また、詩行を構成する句の間だけではなく、隣接・近接する、あるいは離れた詩行の間に見られる同様の現象も、並行法に含まれる (Berlin 1985, 26-29, 156)。この聖書ヘブライ詩の作詩法への新しい洞察によって、それまで気づかなかったアフォリズムの間のつながりを見ることができるようになった (Waltke 2004, 45-48)¹⁵⁾。

しかしながら、箴言第 II 部がアフォリズムを無作為に並べたものではなく、アフォリズムを構成した作品であること、また作品の文脈においてアフォリズムを読むことに意義があることは、まだ聖書学の共通見解となっていない。その原因の 1 つは、この作品の構成の手法が十分に明らかにされていないことにあると思われる。ブルース・ワルトケの注解書は、箴言のアフォリズム部分が構成された作品だとする立場から書かれた最も詳細なものであるが、彼はその序論でアフォリズムの間のつながりは通常の詩におけるようには明瞭ではないが、アフォリズムも「音声、語、統語法、意味」によって結ばれているという適切な見解を示している (Waltke 2004, 45-47)。しかし注解では意味による結合以外をほとんど記していない。詩行間にみられる意味、文法、音声の面の並行法を詳述することは、そうでなくても大部の——この注解は上下二巻で 1100 頁を越える——聖書学の注解書では不可能に近いが、その省略は構成された作品としての読み方の根拠を弱める。

本稿は、箴言第 II 部が構成された作品であることの 1 つの証拠を提示することを目的とし、箴言 16 章 1-9 節を取り上げ、そこに見られる詩行間の意味、文法、音声の面における並行法を詳述し、詩行間の並行法によって形成されたテキストの構造を明らかにする。16 章 1-9 節は、第 II 部の思想の理解において重要な意味を持つ部分であるが、詳しい釈義については稿を改めて行いたい。

II. 試訳¹⁶⁾

- 1 人に属するのは、心による準備。／だが主¹⁷⁾から (来るの) だ、舌の答えは。
- 2 人の諸々の道はみな、自分の目には純粹だ。／だが気持ちを調べる者である、主は。
- 3 主に委ねよ、あなたの業を。／そうすれば、あなたの企ては堅く立てられる。

15) 並行法の言語学的概念に基づく箴言のアフォリズムの配列の分析の初期の例は、ヒルデブランド (Hildebrandt 1988; Hildebrandt 1990) のものである。

16) 本文として BHS (Elliger 1997), BHQ (Waard 2008) を参照した。試訳には、できる限りヘブライ語の構文と語順を反映した。「／」は前句と後句の区切れを表す。後句の始めに付された多義的な接続詞ウエについては、1-3 節、9 節では訳出し、4 節、6 節では略した。() は理解を助けるための訳者による補足。

17) 神名 (יהוה) の発音は正確には伝えられていない。ヤーウエ、ヤハウエ (יהוה) は学術的に再構成された発音である。試訳では、ユダヤ教とキリスト教の伝統に従い、神名に「主」をあてる。この神名には「主人」という意味はなく、この置き換えにはヘブライ語にない意味を訳に加えるという問題点がある。これを避けるために子音表記 YHWH を用いることもできるが、訳文のリズムへの配慮を優先し「主」を用いる。なお学術的議論のため神名の表記は必要であるため、以下の論考ではヤーウエと記す。

- 4 すべてを主は造った、自らの目的のために¹⁸⁾。／邪悪な者さえ、災いの日のために。
- 5 主の嫌悪するものだ、心の高ぶった者はみな。／手に手¹⁹⁾、彼が罰されないことはない。
- 6 友愛と真実によって、咎は贖われる。／主への恐れによって、悪から離れること（ができる）。
- 7 主が、ある人の諸々の道を喜ぶ時、／彼の敵どもさえ、彼と和睦させる。
- 8 僅かな物はよい、義を伴うなら²⁰⁾、／不正を伴う多くの産物よりも。
- 9 人の心は彼の道を企てる。／だが主が彼の一步を堅く立てる。

III. 箴言第 II 部における文脈

箴言 16 章 1-9 節には、語と意味による前後の部分との結びつきがみられる。多くの研究で指摘されるのは、後に続く 10-15 節との結びつきである。1-9 節では 8 節を除くすべての節でヤーウエが現れ、10-15 節では 11 節を除くすべての節でメレク「王」が現れる。そして 1-9 節の中で唯一ヤーウエが現れない 8 節で、10-15 節で用いられる語が使われ（ミシュバト 8、10-11 節、ツェダカー 8、12 節）、10-15 節の中で唯一「王」が現れない 11 節で、1-9 節で用いられるヤーウエが使われる。これらの語の配置によって 1-9 節と 10-15 節は緊密に結ばれている。この構造は偶然とは考え難く、1-15 節は 2 つの下位ユニット、1-9 節と 10-15 節からなる 1 つの文学ユニットとして構成されていると考えられる（Meinhold 1991b, 253; Whybray 1994, 107）。

16 章 1-9 節は前に位置する 15 章 30-33 節とも語と意味によって結ばれている（Waltke 2005, 3-4）。レーブ「心」は、15 章 30-32 節で 2 回（15:30, 32）、16 章 1-9 節で 3 回（16:1, 5, 9）使われる。また 15 章 33 節にあるフレーズ、イルアト・ヤーウエ「主への恐れ」は 16 章 6 節で使われ、さらに 15 章 33 節の名詞アナヴァー「謙遜」に対する対義的な意味をもつ形容詞ガーバハ「高ぶった者」が 16 章 5 節で使われる。

以上の前後の部分との結びつきに加えて、第 II 部における 16 章 1-9 節の文脈として、このユニットが第 II 部全体の中央あるいは後半部の導入部に配置されている点も注目し値する²¹⁾。

第 II 部における 16 章 1-9 節の位置については、次の 3 つの見方がある。アルント・マインホルトは 16 章 1-15 節を後半部の最初のユニット（Meinhold 1991b, 263）、アンドレアス・シェーラーは 15 章 33 節-16 章 15 節を第 II 部の「中核」（Scherer 1999, 190）、ワルトケは、15 章 30 節-16 章 15 節を後半部の序文（Prologue）だとする（Waltke 2005, 3-4）。これらの説は、それぞれの第 II 部全体の構造理解と合わせて検討する必要がある。

18) ラマアネーフにおける 2 重の限定について、Waltke 2005, 34, note 16 を参照。

19) 箴言 11:21 にも見られるこの表現はおそらく合意を結ぶときに互いに手を握る習慣を反映している（Fox 2009, 539）。これによって語り手は以下に述べることの確かさを強調する。

20) ヘブライ語本文の語順を訳文に反映するために「なら」を加えた。

21) 箴言第 II 部は 375 の節からなり、その中央の 188 番目の節は 16 章 4 節にあたる。

IV. 詩行間の並行法とユニットの構造

1. 語による詩行間の結合

i) 反復される語と語根

聖書学で従来キーワードと呼ばれる、語あるいは語根の反復は、言語学的に言えば、意味の面 (aspect) における語のレベルでの対応 (correspondence) の一種である。1-9 節の詩行間には、知覚されやすいこの並行法がきわめて多く見られる。

詩行間で反復される語あるいは語根には、神名ヤーウエ (1-7, 9 節), 「人」を意味するアダーム (1, 9 節) とイーシュ (2, 7 節), レーブ「心」(1, 5, 9 節), デレク「道」(2, 7 節で複数形, 9 節で単数形), 語根 כחן「企て, 企てる」(3, 9 節), 動詞クーン「堅く立てられる, 堅く立てる」(3, 9 節), ラー「災い, 悪」(4, 6 節), コル「みな, すべて」(2, 4, 5 節), ガム「さえ」(4, 7 節) がある²²⁾。

ii) 対義的フレーズ, 対義的語根

詩行間を結ぶ機能を持つと考えられる対義的フレーズとして, 5 節と 7 節の詩行の始めのトアバト・ヤーウエ「主の嫌悪するもの」(5 節) とレツォート・ヤーウエ「主が喜ぶ」(7 節) を挙げることができる。これは, 箴言第 II 部で用いられる対義的フレーズ, トアバト・ヤーウエとレツォーノのヴァリエーションである²³⁾。他に, 箴言で対義的に用いられる語根のラシャー「邪悪な者」(4 節) とツェダカー「義」(8 節) がみられる。

iii) 配置

反復される語 (前置詞, 接続詞を除く) と語根に網掛けを, 対義的フレーズと対義的語根に下線を施すと次のようになる。

לאדם מערכי לב ומיהוה מענה לשון:	1
כל־דרכי־איש זך בעיניו ותכן רוחות יהוה:	2
גל אל־יהוה מעשיך ויכנו מחשבתך:	3
כל פעל יהוה למענהו וגם־רשע ליום רעה:	4
תועבת יהוה כל־גבה־לב יד ליד לא ינקה:	5
בחסד ואמת יכפר עון וביראת יהוה סור מרע:	6
ברצות יהוה דרכי־איש גם־אויביו ישלם אתו:	7
טוב־מעט בצדקה מרב תבואת בלא משפט:	8
לב אדם יחשב דרכו ויהוה יכין צעדו:	9

反復される語と語根の配置には, 次の 3 点が認められる。

- ・人を意味する 2 つの名詞が二重の囲い込み構造をなすように配置されている。A (1 節アダーム),

22) ハイムによる箴言 15:32-16:11 のキーワードの表 (Heim 2001, 207) は詳細だが, 反復されていない語を含んでいる。

23) トアバト・ヤーウエ「主の嫌悪するもの」とレツォーノ「彼の喜ぶもの」の詩行内における対比は, 箴言 11:1, 20; 12:22; 15:8. そのヴァリエーションは, 箴言 3:22; 15:9; 16:12-13; 28:27 にみられる。16:7 では名詞ラツォーンに代わって動詞ラツァーが用いられる。

B (2 節イーシュ), B' (7 節イーシュ), A' (9 節アダム)。B と B' には「人の諸々の道」というフレーズが使われ、B と B' のつながりを強めている。イーシュは、女に対する男も意味するが、ここではヤーウェと対をなしており、アダムと同様に人を意味すると考えられる。人を意味する 2 つの名詞の使用は、おそらく囲い込みを二重にするためだろう。この二重の囲い込みの B' と A' の間に 8 節が挿入されている。

- ・人の振る舞いを指揮する器官とされるレーブ「心」が、ユニットの始め、中央、終わり (1, 5, 9 節) に置かれ、さらに、レーブ「心」と人の振る舞いや人生を意味するデレク「道」が交互に 3 回現れるように配置されている (1, 2, 5, 7, 9 節)。これによって、人の「心」と「道」が全体にまとまりをもたらすトピックとなっている²⁴⁾。
- ・ユニットの終わりに位置する 9 節では、まず 1-7 節で用いられた 6 つの語もしくは語根が使われ²⁵⁾、最後に 1 つ新しい語、ツァアド「一歩」が加えられる。9 節で語り手は、先行する 1-8 節を振り返って想起しながら、それらを踏まえた結びを述べる。

以上の 3 点は 1-9 節を 1 つの文学的まとまりとして結束する効果を持つ。これらは偶然とは考え難く、作品を構成する手法であると考えられる。

以上のように、「人」、「心」、「道」の反復は、全体を結束する二重の囲い込み構造を形成するが、反義的フレーズ、反義的語根は、これとは異なる構造を示す。これらは、後述する下位ユニット (1-3 節, 4 節, 5-7 節, 8 節) の形成に寄与している。

iv) 8 節

8 節だけはこのユニット内の他の詩行との語の反復をもたず、また、上記の二重の囲い込み構造を乱す位置に挿入されている。そのためこれは二次的な付加のように見える²⁶⁾。しかし 8 節は、上述のように用語と意味によって後続の文学ユニット 10-15 節と 1-9 節を結びつける機能を持つのに加えて、統語法によって 7 節と結びつき、また意味によっても 6 節 b-7 節 a とのつながりをもつ (後述)。従って、8 節は、語の反復による構造では付加的であるが、1-15 節の文学的まとまりの観点では付加的ではない。

2. 統語法, 語順, 語形による詩行間の結合

第 II 部における詩行間の文法的並行法、すなわち統語法、語順、語形の対応に関する包括的な研究はまだなされていないが、筆者の調査によれば、意味によって結ばれた詩行の間に文法的並行法がみられることは少なくない。以下に例を挙げる (意味による詩行間の結合は後述)。

i) 詩行の統語法, 語順, 語形

1-9 節にみられる統語法、語順、語形の中で、文法的並行法に関わる主要素の一覧を下に記す。「/」は詩行の切れ目を示し、「/」の左が前句、右が後句を表す。

24) 箴言第 II 部でレーブとデレクはワード・ペアとして用いられる。箴 11:20; 14:14; 19:3; 21:3 を参照。

25) 9 節のヘブライ語本文の順に挙げるとレーブ (1, 5 節), アダム (1 節), 語根 כח (3 節), デレク (2, 7 節), ヤーウェ (1-7 節), 動詞 קוּן (3 節)。

26) フォックスはその可能性を指摘する (Fox 2009, 606)。

- 1 無動詞文／無動詞文。
詩行内の主語述語の非交差配列（述主／述主）。述語：レ・アダーム／ヤーウエ。
- 2 無動詞文／無動詞文。
詩行内の主語述語の交差配列（主述／述主）。
- 3 動詞述語文（命令形）／動詞述語文（未完了形・受動形）。
詩行内の意味的対応語の非交差配列。意味的対応語：גלと יכנו, מעשיך と מהשבתך。
- 4 動詞述語文（完了形・能動形）／動詞省略（gapping）。
- 5 無動詞文／動詞述語文（未完了形・受動形）。
- 6 動詞述語文（未完了形・受動形）／無動詞文。
- 7 詩行全体が1つの文。動詞述語文（未完了形・能動形ヒファイル）。
- 8 詩行全体が1つの文。無動詞文。
- 9 動詞述語文（未完了形・能動形）／動詞述語文（未完了形・能動形ヒファイル）。
詩行内の主語述語の非交差配列（主述／主述）。主語：レブ・アダーム／ヤーウエ。

ii) 等価の中の対照

1 節と 9 節

ユニットの始めと終わりの 1 節と 9 節は、詩行内で同じ構文が反復される点、また詩行内で主語と述語が非交差に配列される点で一致する。さらに前句の始めにアダーム「人」、後句の始めにヤーウエが置かれる語順も一致している。一方、反復される構文が「無動詞文」(1 節)と「動詞述語文」(9 節)である点、また語順が「述主／述主」(1 節)と「主述／主述」(9 節)である点では対照的である。このように 1 節と 9 節における統語法的並行法には等価と対照がみられる。バーリンは「等価の組み合わせの中にある対照の知覚が並行法を効果的にする」(Berlin 1985, 12) と述べており、1 節と 9 節の詩行間の統語法的並行法はその例だと言える。

5 節 b と 6 節 a

5 節 b の述語 (לא יקח) と 6 節 a の述語 (יכפר) の語形は、動詞の未完了形・受動形で一致する。意味は、「罰されないことはない」と「贖われる」であり、対照的。これは語形的等価の中の意味的対照の例である。5 節 b と 6 節 a の結合によって 5-6 節がつながれる。

7 節と 8 節

7 節と 8 節は詩行全体が 1 つの文をなす点で一致する。意味の面では 7 節 a と 8 節につながりがある。

iii) 語形の移行

1-9 節では、意味によって結ばれた詩行の間に、次のような語形の移行がみられる。前方に位置する 3-6 節では、神を暗黙の動作主とする受動形が 3 回用いられ(3 節 b「堅く立てられる」、5 節 b「罰されない (ことはない)」, 6 節 a「贖われる」), 後方に位置する 7-9 節では、神を主語とする使役の能動形ヒファイルが 2 回用いられる (7 節 b「和睦させる」、9 節 b「堅く立てる」)。この移行において、個人の生を治める者である神が背後から前景に立ち現れる。

iv) 4 節

4 節は、完了形を用いる点、また動詞省略のある構文の点で、他と異なる。4 節以外の詞は、個

人の行為や振る舞いに対する神の統治を語るのに対して、4節は神の創造の行為を語る。神と世界の関係という主題を共有しつつも、4節だけは異なる次元の神の行為に光を当てていることが、完了形の使用によって際立つ。

3. 音声による詩行間の結合

聖書ヘブライ詩で音声の並行法が用いられていることは間違いないが、類音や対照的な音の定義は難しく、一般に認められた定義はまだない。以下では、子音の近似の組合せが詩行あるいは句の始めに位置し、音声による詩行の結合を目的としている可能性がきわめて高い例のみを挙げる。

1節と9節

詩行の始めのレ・アダム (לאדם) (1節) とレブ・アダム (לב אדם) (9節)。

2-4節

詩行の始めの科尔 (כל) (2節), ゴル (גל) (3節), コル (כל) (4節)。

6節bと7節a

句の始めのウベイルアト・ヤーウェ (וביראת יהוה) (6節b) とビルツォート・ヤーウェ (ברצות יהוה) (7節a)。なおこれらはどちらも前置詞ベ (ב) を用いるが、その意味は「によって」(6節b) と「時」(7節a) であり、異なる。6節bと7節aの結合によって6-7節がつながれる。

以上の音声によって結ばれた詩行の中で、1節と9節および6-7節は、意味によっても緊密に結ばれているが、2-4節は、意味の点で結束しているとはいえない(後述)。クヌート・ハイムは、2-4節を下位ユニットとみなすが(Heim 2001, 207), ユニットの区分では、意味による構造とその他による構造が一致しない場合、意味を優先すべきだと思われる²⁷⁾。

4. 詩行の意味による詩行間の結合

作品としての箴言第II部の解釈において最も重要なのは、詩行間の意味のつながりである。19世紀後半に箴言注解を著したフランツ・デリッチュは、意味による小規模のまとまりを多数指摘していた(Delitzsch 1873)。その後、この視点は弱まるが、20世紀末にマインホルトは用語と意味によるつながりを手がかりに、研究史上初めて第II部全体の文学ユニットの区分を提示した(Meinhold 1991a; Meinhold 1991b)。彼の区分はすぐれた観察に基づいており、以後の研究は多くをこれに負っている。以下では、詩行間の意味のつながりに関する先行研究を参照し、意味によるユニットの構造を明らかにしたい²⁸⁾。

i) 2つの三つ組み

デリッチュは、1-4節を「すべての原因である神」に関する詞^{ことば}²⁹⁾、5-7節を「神の罰と償いと和解」

27) エリック・レイモンドは、シラ書の詩に関する研究において、語の反復による構造と意味による構造が一致しない事例を示し、詩には複数の異なる構造があること、詩の解釈においては意味による構造を主たる構造とし、その他を副次的構造と捉えるべきこと、しかし、一方を採用するからと言って、他方の存在を否定すべきではないことを指摘している(Reymond 2004, 13)。

28) 箴言16:1-9の詩行の意味の関連性について、Delitzsch 1873, 259-264; Meinhold 1991b, 263-269; Whybray 1994, 88-89, 106-108; Scherer 1999, 189-211; Heim 2001, 206-210; 勝村 2002; Waltke 2005, 605-613を参照。

29) 以下では、箴言の個々のアフォリズムの呼称として「詞」(Spruch, saying)を用いる。第II部の詞はすべて1詩行であり、マソラ本文では1つの節にあたるため、第II部の詩行、節は、1つの詞すなわちアフォリズムである。

に関する詞としてまとめる (Delitzsch 1873, 261)。マインホルトは 1-3 節と 4 節を分け、1-3 節は「人間の計画に対するヤーウエの統治権を扱い」、5-7 節は「人間の振る舞いに対するヤーウエの評価を描く」、その間の「4 節は 2つの三つ組みをつなぐ働きをしているようにみえる」と言う (Meinhold 1991b, 264-265)。確かにデリツチュは 1-4 節の共通の主題を捉えているが、1-9 節の文脈において、神の創造行為を語る 4 節は特異であり、また 1-3 節は以下に述べる手法によって三つ組みとして強く結ばれている。従って 16 章 1-3 節と 4 節を分けるマインホルトがテキストをより正確に捉えていると言える³⁰⁾。

マインホルトは 1-3 節、5-7 節を三つ組み (Drei-Sprüche-Gruppen) とみなす。三つ組みとは、言語学的対応関係によって結ばれた連続する 3つのアフォリズムであり、連続する 2つのアフォリズムすなわちペア (Spruchpaare) と並んで、第 II 部構成の最小単位である (Meinhold 1991a, 25-26)。三つ組みの構成の手法には、同じ特徴によって 3つを並列につなぐ方法と、始めと終わりの詞を強く結びつけ、その間に詞を補足する方法がある。例えば 16 章 27-29 節は前者による。この 3つの詩行はいずれもイーシュ「人」とそれを形容する名詞を連結したフレーズで始まり、それぞれ異なる種類の悪人を描く。これに対して 16 章 1-3 節と 5-7 節では後者の手法が用いられる。

ii) 1-3 節の三つ組み

- 1 人に属するのは、心による準備。／だが主から (来るの) だ、舌の答えは。
- 2 人の諸々の道はみな、自分の目には純粋だ。／だが気持ちを調べる者である、主は。
- 3 主に委ねよ、あなたの業を。／そうすれば、あなたの企ては堅く立てられる。

この 3つの詞はいずれも、人の外部に現れる行為とその人の内部における思考や感情を取り上げている。上掲の試訳で実線を付した語が前者、破線を付した語が後者を表す。この共通性によって 3つは結ばれているが、始めと終わりの 1 節と 3 節は、以下に述べる対応関係によってより強く結びつき、3つを結束する囲い込みをなす。

1 節と 3 節はいずれも、人の「心」の内部にある計画を人と、外部に現れる人の行為を神と結びつけ、人の計画に対する神の支配を語る。内部と外部のものは、1 節では「内/外」、3 節では「外/内」の順におかれ、詩行間において交差配列をなす (Meinhold 1991b, 265)。このように 1 節と 3 節は、より緊密な主題的関連性と意味的対応語の詩行間の交差配列によって強く結ばれている。

1 節と 3 節の間には進展も見られる。トピックは、1 節では発言 (「舌の答え」)、3 節では行為全般 (「あなたの業」) であり、個別的具体的なものから一般的抽象的なものへと進む。また統語法は、1 節では無動詞文の陳述、3 節では命令形を用いた勧告であるが、両者の間には、1 節の陳述が根拠、3 節の勧告がそこから導き出される 1つの結論という論理的連関を認めることができる³¹⁾。

人は発言する前に、予め考えを整理し、論理を組み立てる (マアルケ「準備」(1 節 a) はおそら

30) ワルトケは、4 節が前後の下位ユニットをつなぐというマインホルトの見方を発展させ、1-4 節 a と 4 節 b-7 節を下位ユニットとし、前者が「主の統治権と人間の責任」を、後者が「主の道徳性と人間の説明責任」を扱うとする (Waltke 2005, 9, 12)。しかし 4 節 b には動詞省略があり、4 節 a と切り離しては意味をなさない。4 節 a と b の間に区切れを置くことはできない。

31) 箴言のアフォリズムの間の意味的関連性について、ワルトケを参照 (Waltke 2004, 47)。

くこれを意味する)。1節は、このような「心」の活動は人の領域であるが、人が実際に語る「答え」は神から来ると言う。人は計画を意のままに実行できるのではなく、神がその実行を統御する。神の行為を人間が完全に予測することはできないため、計画と実行の間には予測不可能なものが横たわる。1節は発言を例にとり、人の計画の実行には、神の主権によって限界が設けられていることを述べる（フォン・ラート 1988, 155-158, 162-163）。

3節は、1節の認識に基づく勧告であるが、3節が取り上げる局面は1節とは少し異なる。ここでは計画の実行における計画の実現がテーマとなる。計画を実行しても計画の意図が実現するとは限らない。それを実現するのは神である。計画が実現し成果が持続する（「堅く立てられる」）ことを願うなら、自分の行為（「業」）を神に委ねよと3節は言う。行為を神に託すためには、それが神の意志に一致しなければならないが、3節に先立つ2節に神がいかに人の行為を評価するかが示されている。

1節と3節の間にある2節もまた、人の外部に現れる行為とその人の内部にあるものを取り上げ、人と神を対比するが、ここでは「人の諸々の道」すなわち振る舞い、習慣的行為に対する評価が主題となる（Meinhold 1991b, 266）。たとえ人が自分の振る舞いを「純粹だ」と評価するとしても³²⁾、神は、振る舞いだけではなく、内部にあるルーアハ「気持ち、心情、動機」も問題にする。ルーアハは御しがたいが、人は振る舞いをよくするだけではなく、これを治めなければならない（箴16:32参照）。1-3節の文脈で、2節は計画の実現を願い、行為を神に託す人への助言としての意味を持つ。

1-3節および9節には、それらと類似の思想を表す言葉が古代エジプトの教訓文学およびアラム語アヒカルにみられる（勝村 2002, 24-27; Fox 2009, 608-610）。1-3節、9節では周辺地域の教訓文学から受容された伝統が利用されていると考えられる。

iii) 5-7節の三つ組み

- 5 主の嫌悪するものだ、心の高ぶった者はみな。／手に手、彼が罰されないことはない。
 6 友愛と真実によって、咎は贖われる。／主への恐れによって、悪から離れること（ができる）。
 7 主が、ある人の諸々の道を喜ぶ時、／彼の敵どもさえ、彼と和睦させる。

この三つ組みにおいても、始めと終わりの詞をより明瞭な対応関係によって強く結び、3つを結束する方法が用いられているが、3つの詞の意味の関係は、1-3節とは異なる。

5節と7節は、前句で人の性向・振る舞いに対する神の「嫌悪」あるいは「喜び」を述べ、後句ではそれに対する神の裁きあるいは救いを述べる。いずれにおいても前句が原因、後句が結果であり、詩行間の意味的対応句は非交差に配列されている（A 5a, B 5b, A' 7a, B' 7b）。詩行の始めの対義的フレーズ（上の試訳に実線を付した語）以外には一般的な対義語はなく、また統語法にも対応関係はないが、神の怒りと裁き（5節）、好意と救い（7節）という対照的な詩行の意味によって、詩行間が結ばれている。

5-7節には、この結合に加えて、2. ii) と3で述べたように、5節bと6節aの動詞の語形による結合（破線を付した語）、6節bと7節aの音声による結合（網掛けを付した語）がみられる。

32) 「目」は物事の価値を判断する器官。「純粹だ」は箴言では倫理的に正しいことを言う（勝村 2002, 25）。

これによって 6 節の前句は 5 節と、後句は 7 節と結ばれる一方、6 節内の前句と後句は、句の始めの前置詞を伴うフレーズ、「友愛と真実によって」と「主への畏れによって」（波線を付した語）の音声と意味の面における対応関係によって結ばれている。つまり 5-7 節では、5 節 b と 6 節 a、6 節 a と 6 節 b、6 節 b と 7 節 a がそれぞれ結ばれている。

5 節は、様々な罪の中で「心」の高ぶりを取り上げる。人の「心」の計画の実現に対する神の統治を主題とする 1-3 節の後に続く文脈において、「心の高ぶった者」とは、自分の計画の成功を神ではなく、自分自身の功績とする者であること³³⁾、また、神は人の内部にある「気持ち」を調べ、「心の高ぶった者」を見つけ出すことが暗示されている (Meinhold 1991b, 265)。

5 節 b は「心の高ぶった者」への神の裁きを語り、それに続く 6 節 a は「友愛と真実」による「咎」の贖い (כפר) を語る。「友愛と真実」は詩編に類出し、ヤーウエの人間に対する不変の愛を表す (勝村 2004, 189)。しかしこのフレーズは他者に対する人の親切を意味することもある。6 節 a の「友愛と真実によって」は、6 節 b の「主への畏れによって」と対語になっているため、「主への畏れ」と同じように、「友愛と真実」は人の振る舞いを表すと解釈する注解者もある (例えば、Delitzsch 1873, 262; Murphy 1998, 121; Waltke 2005, 13)。しかし 5 節 b-6 節 a は、出エジプト記 34 章 6-7 節のヤーウエの名と属性の宣言において用いられる一連の語を含んでおり (ヘセドとエメト「友愛と真実」、アヴォーン「咎」、否定詞を伴う動詞 קח「罰さない、罰されない (ことはない)」)、ヤーウエの義と憐れみを伝えるこの宣言を暗示している (Van Leeuwen 1997, 159; Fox 2009, 612)。また 6 節 a における受動形の「咎が贖われる」に対応する能動形の「咎を贖う」は、神が人の罪を赦すことを言い表すために用いられる (詩 78:38)。これらを踏まえると、6 節 a は、5 節 b のヤーウエの裁きに対して、ヤーウエの「友愛と真実」による罪の赦しを述べていると考えられる。

それに続く 6 節 b は、罪を赦された人が「主への畏れ」によって悪行から離れて生きる可能性を提示する。さらに 7 節において、そうして悪から離れ、善を行う人の振る舞い (「諸々の道」) をヤーウエが喜び、その人に敵との和解という恵みを与えることが描かれる。

以上のように、5-7 節は、単に人の振る舞いに対する神の賞罰を対照しているのではなく、出エジプト記 34 章 6-7 節に告げられたヤーウエの名と属性を拠り所としつつ、神の義と憐れみを知り、ヤーウエへの畏れによって悪行を離れ、善を行い、ヤーウエの喜ぶ道を歩み、救いへと向かう道すじを叙述していると思われる。

iv) 4 節と 8 節

4 節は意味によって前と後ろの三つ組み (1-3 節、5-7 節) と結ばれている。すなわち、神が「すべて」の原因であることを述べる 4 節 a は、個人の計画に対する神の統治を扱う第一の三つ組み (1-3 節) に対する根拠づけを、「邪悪な者」への裁き (「災いの日」) を暗示する 4 節 b は、悪人 (「心の高ぶった者」) に対する神の「嫌悪」から始まる第二の三つ組み (5-7 節) の準備をなすと見ることができる (Meinhold 1991b, 267)。

4 節には積義上の議論が多い。4 節 a には複数の多義的な語 (名詞コル「万物、万人、万事」、動詞パアル「造る、遂行する」、名詞マアネ「答え」、「目的」、マアネに付された人称代名詞「彼の、そのの」) があり、解釈が分かれる (Meinhold 1991b, 263; Waltke 2005, 11-12)。また、4 節 b にみられる悪人の創造の観念については、第二神殿期ユダヤ教における位置づけが問題になる。

33) この文脈における「心の高ぶった者」の性格付けは、申 8:14 と比較できる (Meinhold 1991b, 265)。

8節は、上述のように語の反復によって1-9節と10-15節を結合する機能を持つが、意味によって1-9節の詞とも結ばれている。8節aのツェダカー「義」は、6節bの「主への畏れ」と密接な意味的関連性をもつ。このことは、8節の近似のヴァリエーションである15章16節における「主への畏れ」(15:16a)が8節では「義」に代えられていることに見てとれる(Meinhold 1991b, 268)。第二の三つ組み(5-7節)の後に続く文脈において、8節bの「義」は、6節bの「主への畏れ」の実践であり、また8節は、7節aのヤーウエが喜ぶ人の「諸々の道」との文脈において、そのような振る舞いの具体例だということができる(Whybray 1994, 107)。

以上のように、詩行の意味において、4節と8節は三つ組み(1-3節, 5-7節)に対する補足とみなすことができ、またこの観点で適切な文脈に置かれているということができる。

v) 詩行の意味による囲い込み構造

1-9節には、詩行の意味による囲い込み構造がある。これについては2つの見方ができる。1つは、意味的関連性を持つ1節と9節が全体を囲い込むというものであり(Plöger 1984, 189; Whybray 1994, 107)、もう1つは、1-3節の主題「人の計画に対する神の統治権」を9節が再び取り上げ、1-3節と9節が全体を囲い込むというものである(Meinhold 1991b, 26)。どちらもテキストに即しているが、1節と9節には、詩行全体の意味に加えて、統語法、語順、音声の対応があり(2. ii), 3を参照)、これらによって、この囲い込み構造は、より知覚可能性の高いものとなっている。

vi) 9節

- 1 人に属するのは、心による準備。／だが主から(来るの)だ、舌の答えは。
9 人の心は彼の道を企てる。／だが主が彼の一步を堅く立てる。

1節と9節はいずれも、前句で、計画を立てる人の「心」の活動を述べ、後句で、計画の実行・実現を支配する神の活動を述べており、詩行間の意味的な対応句は非交差に配列されている(A 1a, B 1b, A' 9a, B' 9b)。またこの2つの節には上述のように、詩行内の統語法と語順に同じパターン(構文の反復、主述の非交差配列)がみられる。これらが一体となり、9節は1節を反復しているという印象をもたらす。箴言研究では、この2つは同じ考えを言い表すヴァリエーションとみなされることが多い。例えば、旧約の人間論における「心」を論じるトーマス・クリューガーは、2つを並べ「人の心の性能の限界」を扱う詞としている(Krüger 2009, 101)。確かに文脈から切り離して2つの詞を読むなら、この見方は誤りとは言えない。しかし9節は、1節とは異なり、語、意味、統語法、語形によって、1-7節の多くの詞と結びついており、1節とは異なる文脈における意味を持つ。

1. iii) で述べたように、9節の始めの6つの語では、1-7節の語・語根が反復されている。9節はそれらを振り返って想起させる効果を持つ。さらに、人の行為や振る舞いに対する神の統治を語るにあたって、1-7節では、「舌の答え」すなわち発言(1節)、「あなたの業」すなわち個別の行為(3節b)、「人の諸々の道」すなわち習慣的行為(2節a, 7節a)が取り上げられているが、9節ではデレク「道」(9節a)とツァアド「一步」(9節b)が取り上げられる。9節の「道」は、「一步」と対語をなし、目的地的に向かって一步一步進んでいく旅路として個人の人生を表す(Van Leeuwen 1997, 159-160)。このイメージにおいて、人が計画し実行する個々の行為は、旅路における一步に

あたる。つまり 9 節の「道」すなわち旅路としての人生のイメージでは、「一步」に、1-7 節における「舌の答え」、「あなたの業」、「諸々の道」が代表されているのである。

また 9 節は 7 節と密接な結びつきを持つ。上述のように、3 節 b-6 節（4 節を除く）では定動詞はすべて神を暗黙の動作主とする受動形（3 節 b, 5 節 b, 6 節 a）であるが、7 節で定動詞が神を主語とする使役の能動形ヒフィルへ移行する。9 節 b はこれを引き継ぐ。7 節と 9 節の詩行の終わりには、神を主語とするヒフィル未完了形単数 3 人称男性が人称接尾辞を伴う目的語と共に置かれている。これによって語形、意味、音声の結びつきがもたらされる。また前句の最後におかれた「人の諸々の道」（7 節 a）、「彼の道」（9 節 b）も 2 つの節を結びつけている。7 節と 9 節は能動形を用いて、個人の生に対する神の統治を描く。7 節で、神は人の振る舞い（「諸々の道」）を喜び、その人に敵との和平を授ける。これに続く 9 節では、人が企てる人生（「道」）を神は喜び、その人生の歩み（「一步」）を確かなものにする。

以上のように 9 節は、1-7 節と多数の結びつきを持っており、1-8 節との文脈において読まれるよう意図されている。ヤーウエは人の計画の実行と実現を統御し、人の内部にある「気持ち」を調べ、「心の高ぶった者」を嫌い、これを罰するが、「友愛と真実」によって罪を赦す。人がヤーウエを知り、ヤーウエへの畏れをもって悪から離れ、ヤーウエの喜ぶよい振る舞いをなす時、神は人に恵みを与える。これらを学んだ人の「心」は遜り、神の意志に一致するよう人生を企てる。神はその人の人生の歩みを確かなものにする。9 節は、このような理想を描くものとして読むことができる。

詩行の意味による詩行間の結合に基づくユニットの構造は下記ようになる。

詩行の意味による構造

1-3 節 三つ組み

4 節 補足。1-3 節と 5-7 節をつなぐ。

5-7 節 三つ組み

8 節 補足。6 節 b-7 節への補足。1-9 節と 10-12 節の結合

9 節 結び

V. 結論

箴言 16 章 1-9 節には、主として 2 つの構造がみられる。第一は、語の反復による二重の囲い込み構造、A 1 節、B 2 節、B' 7 節、A' 9 節である。囲い込まれた 3-6 節には、語の反復による囲い込みは見られない。また 8 節が二重の囲い込み構造の B' と A' の間に挿入されている。第二は、詩行の意味による構造である。これは、2 つの三つ組み（1-3 節、5-7 節）、その後につされた補足（4 節、8 節）、結びの 9 節から構成される。第二の構造では、キーワードすなわち語の反復は構成の基本的な手法として用いられておらず³⁴⁾、キーワードを偏重する研究方法ではこの構造を捉えることができない。しかしこの構造において、詩行間は意味だけではなく、統語法、語や句の順序、語形、音声の対応関係によっても結ばれている。

バーリンは、並行法では等価の中に対照があることを指摘したが、このユニットの並行法で結ば

34) ただし先行する複数の詩行で用いられた 6 つの語を 9 節において使うという特殊な手法がみられる。

れた詩行間にも等価の中の対照がみられる。また、ジェームズ・クーゲルによれば、後句における意味の強化と進展に並行法の特質はあるが (Kugel 1981, 12), このユニットの並行法で結ばれた詩行間においても後方の詩行における進展がみられる。この事実は、箴言研究において用いられるアフォリズムの「群れ, 房 (cluster)」というイメージが第 II 部にはふさわしくないことを示唆している。箴言第 II 部のアフォリズム文学は、始めから終わりに向かって読まれるテキストとして構成されている。

箴言 16 章 1-9 節の 2 つの三つ組みのうち、第一の三つ組みでは、周辺地域の教訓文学から受容された伝統が用いられ、第二の三つ組みでは、出エジプト記 34 章 6-7 節にみられるヤーウェの名と属性の伝統が想起されている。しかし 2 つの三つ組みが異なる伝統を用いていることをもって、これらを異なる作者に帰すことはできない。なぜなら、語の反復による二重の囲い込み構造、また 9 節における先行する詩行の語の反復などの手法によって、2 つの三つ組みは、高度に構成された作品の一部となっているからである。従って、この 2 つの三つ組みは 1 人の作者³⁵⁾によって書かれたと考えるべきである。

箴言 16 章 1-9 節は、第 II 部の後半部の導入部もしくは中心に位置し、ヤーウェについての詞が集められた特別な文学ユニットであり、他のすべての部分とこれと同様に精巧に構成されていることはないかもしれない。しかし筆者の調査によれば、アフォリズムの間を意味だけではなく、統語法、語順、語形、音声における対応関係によって結合するこのユニットに見られる手法は、他の部分にもみられる。語の反復や詩行の意味だけではなく、文法と音声の並行法にも目を向けることによって、箴言第 II 部の文学的構造の解明が進むことが期待される。

参考文献

- 外国語雑誌, 叢書, 辞典の略号は, Collins, B. J. et al., eds. 2014. *The SBL Handbook of Style*, 2nd ed. Atlanta: SBL Press に準拠した。
- Berlin, A. 1985. *The Dynamics of Biblical Parallelism*. Bloomington: Indiana University Press.
- Clines, David J.A., ed. 1993-2011. *The Dictionary of Classical Hebrew I-VIII*. Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Cook, Johann. 1993. The Dating of Septuagint Proverbs. *ETL* 69: 383-399.
- Cook, Johann. 1997. *The Septuagint of Proverbs: Jewish and/or Hellenistic Proverbs? Concerning the Hellenistic Colouring of LXX Proverbs*, VTSup 69. Leiden: Brill.
- Cook, Johann. 2003. The Greek of Proverbs: Evidence of a Recensionally Deviating Hebrew Text? In: Paul, S. M. et al., eds. *Emanuel: Studies in Hebrew Bible, Septuagint, and Dead Sea Scrolls in Honor of Emanuel Tov*. Leiden: Brill, 605-618.
- Delitzsch, Franz. 1873. *Biblischer Commentar über die poetischen Bücher des Alten Testaments 3: Das salomonische Spruchbuch*, Leipzig: Dörfpling & Franke.
- Elliger, Karl. et al., eds. 1997. *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, 5th ed. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.

35) 箴言第 II 部は、伝統を利用し、それらを詩の技法を用いて巧みに変形して書かれた作品であると思われる。この作品における伝統の利用を重視する場合には、制作者を編集者、また、詩的な構成を重視する場合には、作者と呼ぶことができる。コヘレト書やヨブ記のような個人の作品という性質の強い書物とは異なり、伝統への依存の度合いが高い箴言のアフォリズム文学の制作者を作者と呼ぶことへの異論はあり得るが、編集者という呼称は、この作品がいわゆる「編集」、例えば、口頭伝承の文書化、既成の文書への編集層の付加のような作業だけによってできたという誤解を招きやすい。そのためここでは文学ユニットの制作者を作者と呼ぶ。

- Forti, Tova. 2017. Septuagint. In: Lange, A. et al., eds. *Writings. Textual History of the Bible. The Hebrew Bible 1C*. Leiden: Brill, 253-259.
- Fox, Michael V. 2009. *Proverbs 10-31: A New Translation with Introduction and Commentary*, AB 18B. New Haven & London: Yale University Press.
- Fox, Michael V. 2015. *Proverbs: An Eclectic Edition with Introduction and Textual Commentary*, HBCE 1. Atlanta: SBL Press.
- Gemser, Berend. 1937. *Sprüche Salomos*, HAT. Erste Reihe. Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Heim, Knut M. 2001. *Like Grapes of Gold Set in Silver: An Interpretation of Proverbial Clusters in Proverbs 10:1-22:16*, BZAW 273. Berlin: Walter de Gruyter.
- Hildebrandt, Ted. 1988. Proverbial Pairs: Compositional Units in Prov 10-29. *JBL* 197: 207-224.
- Hildebrandt, Ted. 1990. Proverbial Strings: Cohesion in Proverbs 10. *Grace Theological Journal* 11.2: 171-185.
- Koehler L. et al. 1967-1990. *Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament I-IV*. Leiden: Brill.
- Krüger, Thomas. 2009. Das «Herz» in der alttestamentlichen Anthropologie. In: *Das menschliche Herz und die Weisung Gottes: Studien zur alttestamentlichen Anthropologie und Ethik*. Zürich: Theologischer Verlag Zürich, 92-106.
- Kugel, James L. 1981. *The Idea of Biblical Poetry: Parallelism and Its History*, New Haven: Yale University.
- Meinhold, Arndt. 1991a. *Die Sprüche Teil 1*, ZBK. AT16.1. Zürich: Theologischer Verlag.
- Meinhold, Arndt. 1991b. *Die Sprüche Teil 2*, ZBK. AT16.2. Zürich: Theologischer Verlag.
- Murphy, Roland E. 1998. *Proverbs*, WBC. Nashville: Nelson.
- Plöger, Otto. 1984. *Spüche Salomos (Proverbia)*, BK XVII. Neukirchen-Vluyn: Neukirchner Verlag.
- Polak, Frank H. 2009. The Place of the Dikaios: Creative Translation and Verse Order in the Septuagint of Proverbs. *Textus* 24: 133-152.
- Rahlf's, Alfred. 1976. *Septuaginta*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Reymond, Eric D. 2004. *Innovations in Hebrew Poetry: Parallelism and the Poems of Sirach*, SBLStBL 9, Atlanta: Society of Biblical Literature.
- Scherer, Andreas. 1999. *Das weise Wort und seine Wirkung: eine Untersuchung zur Komposition und Redaktion von Proverbia 10,1-22,16*, WMANT 83. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag.
- Scoralick, Ruth. 2002. Salomos griechische Gewänder: Beobachtungen zur Septuagintafassung des Sprichwörterbuches. In: Löning, K. and Fassnacht M., eds. *Rettendes Wissen: Studien zum Fortgang weisheitlichen Denkens im Frühjudentum und im frühen Christentum*. Münster: Ugarit-Verlag, 43-75.
- Tov, Emanuel. 1999. Recensional Differences between the Masoretic Text and the Septuagint of Proverbs. In: *The Greek and Hebrew Bible: Collected Essays on the Septuagint*. Leiden: Brill, 419-431.
- Tov, Emanuel. 2012. *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 3rd ed. Minneapolis: Fortress.
- Tov, Emanuel and Ulrich Eugene. 2016. The Search for an Original Text (Textual Theories). In: Lange, A. and Tov E., eds. *Textual History of the Bible Vol. 1A: Overview Articles*. Leiden: Brill, 15-19.
- Ulrich, Eugene et al, eds. 2000. *Qumran Cave 4. XI, Psalms to Chronicles*, Discoveries in the Judaean Desert XI. Oxford: Clarendon Press.
- Ulrich, Eugene. 2016. Post-Qumran Theories (Textual Theories). In: Lange, A. and Tov E., eds. *Textual History of the Bible Vol. 1A: Overview Articles*. Leiden: Brill, 10-15.
- Van Leeuwen, Raymond C. 1997. The Book of Proverbs. *The New Interpreter's Bible* 5. Nashville: Abingdon Press, 17-264.
- Waard, Jan de. 2008. *Biblia Hebraica Quinta, Fascicle 17: Proverbs*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Waltke, Bruce K. 2004. *The Book of Proverbs: Chapters 1-15*, NICOT, Grand Rapids: Eerdmans.
- Waltke, Bruce K. 2005. *The Book of Proverbs: Chapters 15-31*, NICOT, Grand Rapids: Eerdmans.
- Whybray, R.N. 1994. *The Composition of the Book of Proverbs*, JSOTS 168. Sheffield: JSOTS Press.

- 池内紀 2014 「アフォーリズム」, 『改訂新版世界大百科事典』, 平凡社. JapanKnowledge. <https://japanknowledge.com>. 2022/02/22 参照.
- 勝村弘也 2002 「箴言における積義上の問題 (2)」, 『キリスト教論藻』 33, 15-36.
- 勝村弘也訳 2004 「箴言」, 『ヨブ記, 箴言』, 岩波書店, 177-306.
- 加藤久美子 2016 「箴言第 II 部の格言における二句一組の形式に関する一試論: 並行法の〈新定義〉を参照して」, 『旧約学研究』 第 12 号, 日本旧約学会, 59-82.
- 加藤久美子 2020 「魅力ある女は, 名誉を掴む／自分自身に報いる者だ, 友愛に富む男は: ヘブライ語聖書箴言 11 章 16-22 節の構造と意味」, 勝又悦子他編 『一神教世界の中のユダヤ教: 市川裕先生献呈論文集』, リトン, 113-133.
- フォン・ラート, G. 1988 『イスラエルの知恵』, 日本基督教団出版局.